



東京学芸大学リポジトリ

Tokyo Gakugei University Repository

ICT・オンラインツールを活用した国際交流事業の 運営

著者	豊嶋 維
雑誌名	研究紀要 / 東京学芸大学附属高等学校
号	59
ページ	49-52
発行年	2022-03-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/00173717

ICT・オンラインツールを活用した国際交流事業の運営

Managing cultural exchange program with online applications and ICT

英語科 豊 嶋 維

<要旨>

本稿は ICT を活用した非英語圏の高校生との交流事業についての実践報告である。コロナ禍においてなるべく対面の機会を減らしながらも、一人一台 PC を持っているという環境を生かして交流事業を実施した。ビデオ会議ツールや Google Workspace のアプリケーションを活用しながら、最終的に 3～5 名ずつのグループでビデオチャットを 1 時間行なった。オンラインツールによりオンライン交流事業が容易になっているのはもちろん、一人一台 PC によりさらに運営が容易となり、また生徒は海外の生徒と英語を介してやりとりする機会を得られ、教員側の準備の負担は軽減しつつも生徒の満足度の高い交流事業を行うことができた。

<キーワード> 異文化交流、ICT、PC、国際交流、1to1、Google Workspace

1 趣旨・概要

日本における英語学習において、内的動機を得ることはとても難しい。それは日本人のほとんどが英語を EFL (English as a foreign language) として学んでおり、日常生活で英語を用いていないこと、また英語を用いなければならない状況に置かれることがないという目的のなさによるものと考えられる。言語は他人とコミュニケーションを図るためのツールであり、実際に用いながら意思疎通を図らなければその役割は果たせていないとも言えるが、英語教育の現場では常にやりとりの必然性やその機会を作れているわけではないのが現実である。

その理由としてはあくまでも外国語として言語を学んでいるため、語彙や文法など基本的な知識を身につける必要があること、基礎が身に付いていない状態ではそもそもコミュニケーションが成り立たなくなってしまうことが挙げられる。授業時間が限られている以上、コミュニケーションに時間を割きたくともその前提部分にどうしても時間をかけざるを得ないというのが英語教員の悩みである。

また本校生徒の中に、高い英語力を持っているが使う機会がなく持て余している生徒や、授業での限られた活動に物足りなさを感じている生徒がいることも日々感じていた。そこで、日本人の高校生が英語をコミュニケーションツールとして用いる場を用意するために、授業外の時間に英語を母語としない海外の高校生と話す機会を設けることにした。大きく以下の 3 つの点を軸にこの条件を作成した。

1. 授業から切り離れた活動にすることで、評価や正確さに囚われない英語を使う場面を作ること。

2. お互いの母語は用いることはできないので、英語を使わざるをえない状況になっていること。
3. 同じ EFL 環境の同年代とのコミュニケーションは心的ハードルも低くできること。

2 背景

本校の過去の海外交流実践を紹介する。

いくつかの国際交流事業が行われてきているが、SSH (スーパーサイエンスハイスクール) 事業に関わるものが多く、いわゆる「文化交流」をメインとしたものは少ない。

●タイの高校生と対面交流 (～2020)

SSH の一環として 1 週間ほど互いの高校を訪れて研究発表を兼ねた交流を行なっている。主に理系の研究発表が中心になるので文化交流的要素は薄く、文系生徒の参加しづらさがあることが難点。

●タイの高校生とオンライン共同研究 (2020～)

上記のプログラムがコロナ禍において実際に現地に行くことが難しくなったため、現在オンラインで共同研究を進めている。

●韓国の高校生とビデオチャット (2019)

修学旅行前の事前交流としてオンラインでの交流を行なった。使用したアプリケーションは Google hangout でパートナーを決め一対一の通話を数回行った。

また、対大学生との交流事業としては光田・小太刀 (2018, 2019) の留学生授業の実践がある。これは英語表現 II の授業内に東京学芸大学に通う留学生を呼んで、留学生を交えながら英語でディスカッションなどをする授業であった。

3 今回の実践

3-1 事前準備

3-1-1 企画

今回はインドネシアの高校生との交流事業を企画した。インドネシアの英語教員と以前からつながりがあり、数年前には文通をする“pen pal” project を実施したことからそれに続く交流が話題に上がった。現在インドネシアもコロナ禍で授業に制限があること、例年行っているような交流事業も悉く頓挫してしまっていること、オンラインツールについては高校生皆がこの1年間でずいぶん慣れ親しんでいることなどを確認し、今回のオンライン交流事業について提案した。

インドネシアとは時差が2時間しかなく、メールのやり取りだけでなく、同期型のオンラインチャットについても問題なく実施できることを確認し、生徒の英語力についてもさほどかけ離れてはいないことから文化交流をテーマに据えた交流事業をオンライン同期型で行う方向で決定した。

同期型のオンラインビデオチャットを最終目標に据えた時に、ただ文化交流といっても何の準備もなく即興的に話すのは生徒の英語力によっては難しいと考え、事前に文化について少し調べ、まとめる時間をとり、動画を作成し相手に共有してからビデオチャットに臨むという計画とした。

基本的にはメールのやりとりで内容を確認し、一度教員間のオンラインミーティングを行なって意向確認を行った。

3-1-2 参加者募集

参加学校はインドネシアの高校1校と本校（東京学芸大学附属高等学校）の合わせて2校で、各校30名程度の参加を想定とし募集をかけた。実施時期が11月のため、高校1～2年生を対象とした。最終的な参加人数は28人であった。

提示した募集要項としては、参加要件は全く設けず、グループで動画の作成とオンラインビデオチャットを行うことのみ伝えた。作成したポスターを授業連絡に用いている Google Classroom に投稿し、申し込みの Google form を同時に共有した。参加希望者対象の説明会を開き、そこでグループ分けの確認を行った。グループ分けは動画で扱いたいトピックを基にし、大きく「観光」、「食べ物」、「伝統」、「漫画・アニメ」のテーマを提示した上で、3～5人のグループを作らせた。説明会の場でグループを作ったので、学年をまたぐグループもできた。

3-1-3 実施までの流れ

説明会以降は申し込みフォームで収集したアドレスへメールで一斉連絡をし、対面の集会を行うことはしなかった。

説明会は10月中旬に実施、その後中間試験を経て、10月末までに動画の作成をさせた。動画はグループで作成したのち、指定の Google ドライブに提出をさせた。

先方と参加者のマッチングを行うため、スプレッドシートを用意し、名簿を作成した。名前（英語表記）の入力は生徒自身にさせた。自分たちの扱うトピックも合わせて入力させることで、そのまま先方と共有できる形にした。基本的に必要な情報はこのスプレッドシートに集約しておくことで困った時はこのスプレッドシートを見ればよいようにしておいた。（図1参照）

オンラインビデオチャットは11月中旬を予定していたが、候補日の3日のうち希望日時をスプレッドシートへ入力させ情報を集約した。（図1の“online meeting”は決定日時のみを反映している）

動画が完成して提出されたら、動画の Google ドライブのリンクをスプレッドシートに載せ、どの動画がどのグループのものなのかをわかるようにしておいた。（図1の“the link of video”）

11月に入ってから似たトピックのグループが組み合わせられるようにマッチングを行なった。

チームは合計8つできたため、Google カレンダーから事前に Google Meet の予定を8つ作成しておき、こちらもスプレッドシート上に情報をまとめて先方と共有した。（図1の“the link of meet”）

3-2 当日準備

オンラインビデオチャットは1時間を予定し、放課後時間を使った。広めの教室を2つ用意し、1つは予備として確保しておいた。

本校生徒たちへはメール連絡で開始時間について伝達をし、早めに Meet へ接続するよう確認をした。生徒は一人一台 PC を持っているの、それを持参するよう指示をした。一人一台での参加でもグループで一台の PC から参加でも良いとしたが、一人一台の場合はイヤホンを持参しハウリングが起きないように注意をした。

教員は会場の準備やハウリングが起きていないかの確認、接続状況の注意をしながら様子を確認した。グループごとのチャットには全く介入せず、様子を見守った。4グループが同じ部屋から接続をしても問題なく接続をすることができたが、接続状況はタイミングによって変

	G	H	I	J	K	L	M	N	O
1		TOPIC	Student1	Student2	Student3	Student4	online meeting	the link of video	the link of meet
2		1 Culture					11/11(Thu) 16:00-17:00	https://drive.google.com/file/...	https://meet.google.c...
3		2 Manner					11/11(Thu) 16:00-17:00	https://drive.google.com/file/...	https://meet.google.c...
4		3 Sightseeing					11/10(Wed) 15:30-16:30	https://drive.google.com/file/...	https://meet.google.c...
5		4 food					11/10(Wed) 15:30-16:30	https://drive.google.com/file/...	https://meet.google.c...
6		5 Anime					11/10(Wed) 15:30-16:30	https://drive.google.com/file/...	https://meet.google.c...
7		6 Metro					11/11(Thu) 16:00-17:00	https://drive.google.com/file/...	https://meet.google.c...
8		7 School					11/11(Thu) 16:00-17:00	https://drive.google.com/file/...	https://meet.google.c...
9		8 Culture					11/10(Wed) 15:30-16:30	https://drive.google.com/file/...	https://meet.google.c...
10		9							
11		10							

(図1) スプレッドシート

わるので、随時様子を見ながら臨機応変な対応が必要であった。教員は2～3人体制で見守った。(図2参照)



(図2) オンラインビデオチャットの様子

4 事後アンケートについて

ビデオチャット後に Google form を用いて、事後アンケートを実施し、参加生徒の海外経験についてやビデオチャットを受けて感じたことなどを聞いた。

4-1 参加生徒について

参加生徒の海外経験はさまざまではあったが、半数以上が英語圏には限らないが一年以上海外経験のある生徒であった。本校には帰国生の入学枠があるが、その枠の生徒に限らず、海外経験をもつ生徒が多かった。

英語の外部試験等の資格取得状況も合わせて聞いたが、英検であれば準1級以上を取得している生徒の割合が高く(28人中、英検1級取得者は3人、準1級取得者は5人)、比較的英語力の高い生徒が集まっていたように感じる。故に簡単な英語でのコミュニケーションは問題なく行っている生徒が多かった。

もちろん海外経験が全くなかったり、英語が苦手な生徒もいたが、グループ活動にしたため英語が得意な生徒

がうまく間に入って助け合いながら話せた様子であった。海外交流という目的で集まった生徒たちであるので、普段関わらないような同じ学年の生徒や他学年の生徒とも話す機会にもなったようである。

本校生徒の1、2年生は「1to1」を進めており、一人一台 Macbook Air を持っている。自分のデバイスでオンライン授業を受けた経験もあり、PCやアプリケーションの扱いには皆慣れていて、Google Meet では文字でのチャットのやり取りもしつつトラブルシューティングを生徒自身が行っていた。

4-2 参加前に作成した文化に関する動画について

ビデオチャットを見据えて、グループでテーマに基づいた動画を作成したが、それに関して意見を聞いた。

まず事前の動画作成については「動画はあった方がよかった(ないと話題に困った)」「動画はなくてもよかった(違う話題でそれなりに盛り上がった)」「動画はいらなかった」の3項目で質問をしたが、約半数が「動画があった方がよく、ないと話題に困った」と答えており、動画は要らなかったと答えた生徒はいなかった。特に「動画はあった方がよかった」と回答した生徒に英検1級取得者はいなかったり、海外経験があっても英語圏ではなかったりと英語の日常会話にまだ自信がない生徒にとっては動画が会話の助けになったようである。

このことから英語力に幅がある活動の際に事前に話題を用意しておくこと、また英語での動画作成に当たって関連語彙などを調べておいたことも良かったと考える。

動画作成期間については、企画からビデオチャットの実施までに期間が短く、かつ定期試験期間を挟んだこともあり、満身に時間が取れなかった点は生徒からも声が上がっており、反省事項でもある。最低でも1ヶ月程度の期間があった方が動画の質も上がりこだわった作品ができたように思う。

4-3 参加した生徒の感想

参加生徒の感想をいくつか抜粋して紹介する。

「私自身は海外に住んでいたことはあるけれど、英語圏ではなかったし、本当に幼い頃なのでないに等しく、英語でのコミュニケーションもあまり得意ではなかったけれど、英語が得意な友達に助けられました。自分の考えを英語で伝えられる友達の姿はとてまかつ良かったし、今回の交流で英語を使えることがどれだけ世界を広げることになるのかわかったので頑張ろうというモチベーションにもなりました。」

「SNSでチャットをして、当日よりもお互い仲良くなれています。勇気をだして参加して良かったと思います。またこのような機会があれば参加したいです。また、海外の学生と交流できたことはもちろん、異なる学年の生徒とも交流するきっかけになり、とても楽しかったです。」

「声が聞き取りづらいこともありましたが、同じグループの子たちの英語力にも助けられ、時間いっぱい沢山話すことができました。たわいもない学校の話で盛り上がったたり、今この教科何教わってる？など、日本で友達に話す感覚で話すことができました。インドネシアの子たちも「私たち気が合うね」「前から知り合いだったみたい」「親友だね」など言ってもらえるほど、あっという間にすぎた楽しい時間でした。」

「今まで海外の方と長い時間コミュニケーションをとることがなかったので、とてもよい機会になりました。会話の中では写真やボディーランゲージを用いていることも多く、言語だけで会話をしようとしなくても伝えることが出来ることがよくわかりました。」

「話したいことも話せたし、話題がなくなって困ることもなかったから、4人くらいでちょうどよかった。」

「大人数で活動するパートと少人数で活動するパートがあったら、それも楽しいと思う。」

5 実践を経て

生徒の自由記述の感想からも本企画の目的としていた英語を話す機会を得ることや正しさに囚われず同世代の日本の外に住む高校生と英語でやりとりをするということが実現できたように思う。今回は9月末に先方から話が来て、10月に準備、11月に実施というタイトなスケジュールの中で進めたために、手間取った部分や足りないと感じた部分もあったが、一方で短期間でも海外交流は実現できるという実践の報告になったと思う。

コロナ禍でオンライン授業の実践などが増えたことにより、オンラインビデオチャットを使うハードルが下がり、今までも可能であったがあまり手が伸びなかった国際交流のハードルが非常に下がっていると感じる。またビデオチャットの中でSNSなどの新たなつながりができたことで、今後実際に対面で会うことも可能であり、未来へ交流のきっかけを残すことにもなった。英語を教科の枠の中だけで扱うものでなく、実際に生活の中でコミュニケーションをするために活用するものとして扱うことができたことは非常に貴重な機会となった。今回得たノウハウを次回に生かしていきたい。

6 参考文献

光田怜太郎・小太刀知佐（2019）「留学生授業の展開：授業での留学生による学習支援」（『東京学芸大学附属高等学校研究紀要第56号』（39-48,2019年））

光田怜太郎・小太刀知佐（2018）「留学生授業の実践—授業での留学生とのディスカッションと言語学習—」（『東京学芸大学附属高等学校研究紀要第55号』（65-74,2018年））